

暮らしを支えるみなとの情報誌
Vol.99 July 2022

100th
since 1922
Anniversary
日本港湾協会

特集

災害対策最前線 防災・減災、国土強靱化

特別寄稿

今後の災害対策のあり方

河田恵昭

関西大学特別任命教授・社会安全研究センター長

東日本大震災の教訓と伝承

津田修一

日本港湾空港建設協会連合会専務理事
(元国土交通省東北地方整備局長)

港湾

7

月号



公益社団法人日本港湾協会
The Ports and Harbours Association of Japan

酒田日和山公園逍遙—北前船の面影—

西廻り航路350年

今年は、河村瑞賢が西廻り航路を整備してから350年にあたる。酒田では、1672（寛文12）年幕命を受けて出羽の城米を江戸に廻漕するため、酒田湊を起点とした西廻りの航路を整備したことで酒田湊繁栄の基礎を築いた人物として知られている。日和山公園には、河村瑞賢の銅像が建つ。

西廻り航路と御米置場

瑞賢は、最上川を利用して城米を酒田湊に運び、酒田から廻船に積み替えて下関、瀬戸内海、紀伊半島を経由し、直接江戸に廻漕する安全な西廻り航路の整備計画を立て、酒田には幕府専用倉庫（御米置場、瑞賢倉）を置いた。西廻りでの航路整備は1671（寛文11）年から準備されているが、御米置場の造営は翌年の1月に手代雲澤六郎兵衛、梅津三郎兵衛等を酒田に派遣し、ひと月あまりで完成させている。造営地は、火事が多い酒田で類焼を避けるため、人家から離れた、廻漕にも便利な河口近くの高野浜（こやのはま）が選ばれた。約3万人の人夫を動員し、東西83間・南北53間の規模で4万俵の土嚢を積み上げ、周囲には土居・空堀・木柵をめぐらしている（『飽海郡誌』巻4）。御米置場は文字どおり、野積みであった。瑞賢自身は1672（寛文12）年4月に酒田に入り、第1陣として庄内丸岡および由利の城米を積んで5月初めに出帆させ、2か月ほどで直接江戸に廻漕することに成功した。

西廻りによる安全な航路の整備は、城米のみならず蔵米や納屋米、廻漕物資の増大をもたらし、後に活発となる蝦夷地（北海道）との交易の航路と一体となって、酒田湊が諸国往還の津として大きく発展する礎となった。御米置場は明治維新を迎えるまで

利用され、維新後は取り壊されたが、現在その跡地が日和山とともに都市公園となっている。

日和山

日和山は、日和を見る（天候を予測する）ために、船乗りが使った港近くの見晴らしのよい小山のことで、酒田では、1794（寛政6）年に米沢藩上杉家の重臣莅戸善政（のぞき よしまさ）が記した『酒田往復記録』に、「御陣屋（御米置場）」とともに「日和阜（ひよりおか）」として柵に囲まれた方形の小高い丘を描いている。柵の中には、天候を予測する時に使用する方角石も描かれ、日和阜は寛政期にはいわゆる日和山として利用されていたことが分かる。

1813（文化10）年には、この丘に盛土して常夜灯が設置されている。沖合からの目印と廻船の安全を祈願して建てられたもので、紀州日方浦の船頭橋本屋源助等が建立し、酒田の豪商鑑屋をはじめ、長州下関、筑前芦屋、肥前、備後尾道、摂州神戸、大坂、泉州貝塚、紀州日方、同日高等の西廻り航路の諸湊の廻船問屋の名前が刻まれている。

その後の日和山

日和山は、港の繁栄とともに景勝地にもなった。文久年間（1861～1864）に版行された『酒田十景』には「日和山眺望」が選ばれている。方角石、常夜灯は元々あった場所から移設されているが、幸いにも公園内に残されている。1895（明治28）年、最上川対岸の宮野浦に建てられた木造灯台も移築、保存されている。隣接地には、北前船の船乗りが航海の安全を祈願した社も現存する。日和山公園には、酒田港の歴史を物語る様々な史跡が残され、北前船の面影を肌で感じることができる。



日和山公園—常夜灯から最上川河口・日本海を望む—（著者撮影）